

水稲種子（とちぎの星）栽培ごよみ（普通植え）

優良種子とは

「純粋性」、「健全性」、「良質」を備えたもの

- 異品種や異種穀粒、夾雑物が混入していない。
- 発芽率、発芽揃が良い。
- 種子伝染性病害虫（ばか苗病等）に侵されていない。
- 被害粒、未熟粒および異物の混入がない。

「純粋性」、「健全性」確保のために

疑わしくは抜くべし!!

「これは異株かな??」と迷ったら
その株全体を株元から抜き取る。

異株の除去

収穫まで最低4回以上は実施する。

分けつ最盛期 まで	・条間及び株間等に生えている株は漏生とみなし抜き取る。 ・葉の形状や色の異なる株、斑入り株を抜き取る。
出穂期頃	・漏生株、出穂の早い株、草型の異なる株、斑入り株、出穂の遅い株、不稔株等を抜き取る。
登熟期	・登熟ステージの異なる株、籾の大きさ・形・着粒の粗密・芒の色等が異なる株を抜き取る。
成熟期前	・熟期の異なる株、籾の大きさ・形・着粒の粗密等が異なる株を抜き取る。

種子伝染性病害虫（ばか苗病等）を防ぐ

ほ場にあってはならない。
見つけ次第株ごと除去する。

適正な収穫・乾燥・調製作業による発芽率確保と混種防止の徹底

1. ほ場の選定

- 種子場は同一品種の団地になるよう調整し、近隣ほ場に交雑可能な品種の作付が無いよう近隣農家と連携を図る。特に「うるち」と「もち」品種の交雑に注意をする。

2. 土づくり・施肥

（土づくり）

- 有機物の施用例 良質完熟堆きゅう肥：0.5～1トン/10aを目安
ただし、未熟有機物（堆肥等）の施用は混種や雑草多発を防止するため実施しない。

（施肥）

- 施肥量は一般慣行栽培の1割減とする。

基肥窒素	穂肥窒素	穂肥時期
3kg/10a	2～3kg/10a	出穂前15日

- 施肥量の例（10a当たり）

全量基肥施肥栽培の場合

肥料名	施肥量
ひとふりくん464	30～35kg

分施肥（基肥＋追肥）の場合

	肥料名	施肥量
基肥	B B F 284号	15～25kg
追肥	B B N K 202号	10～15kg

3. 種子消毒・浸種・催芽

（種子消毒） ●種子伝染性病害虫防除のため必ず種子消毒を行う。

- イネ心枯線虫病対策として、スミチオン消毒を行う。

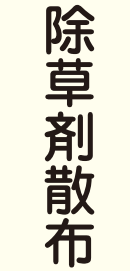
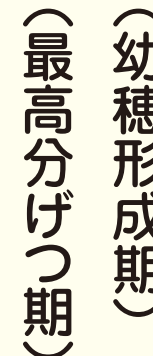
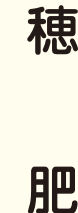
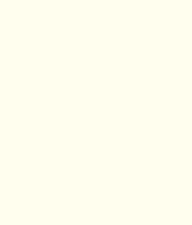
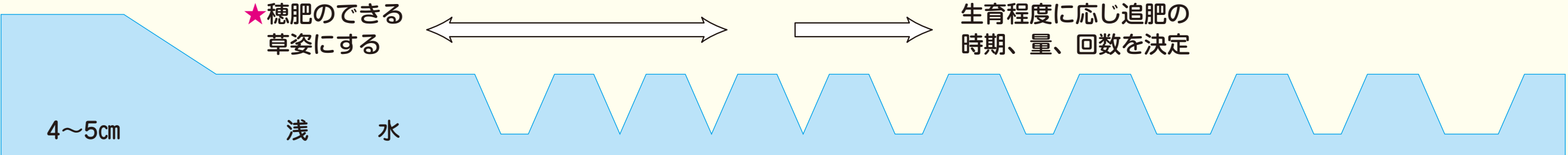
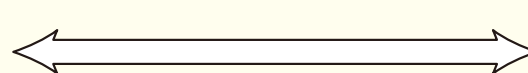
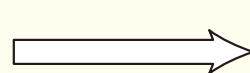
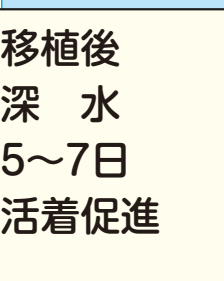
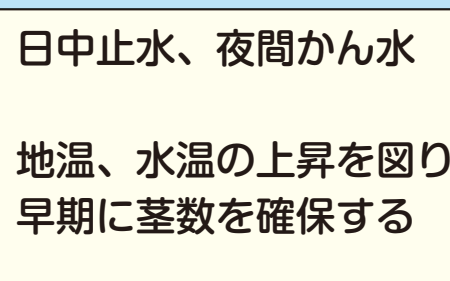
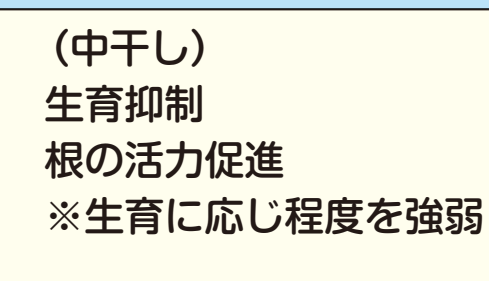
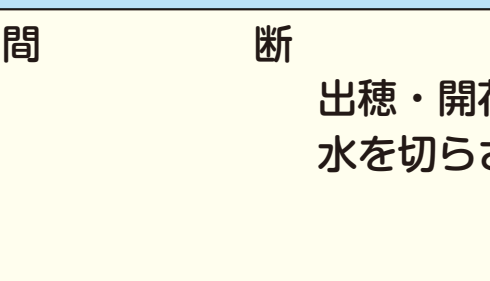
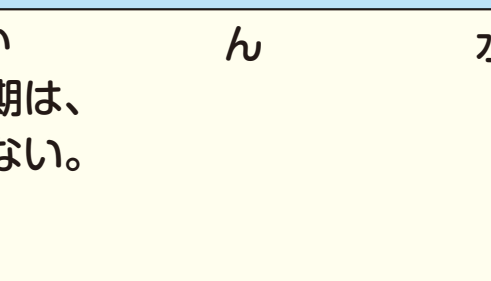
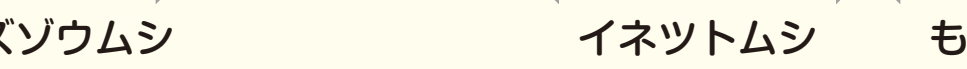
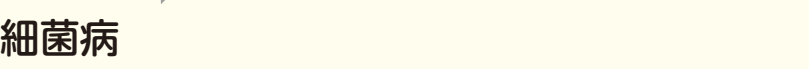
（浸種） ●積算温度は120～130℃を目標に行う。

- 水量は種子粉量の2倍量で行い。最初の3日間は水を交換しない。その後2～3日毎に水を交換する。

（催芽） ●催芽器、育苗器等で28～30℃でハト胸状態にする。

4. 播種

- 播種量は1箱当たり150g以下とする。（乾燥籾播種量）
- 播種作業は一般栽培の種子と同時に行わない。また、播種機は作業前に十分に清掃し混種が起らないように注意する。

月	5月				6月				7月				8月				9月				10月			
旬	下		上		中		下		上		中		下		上		中		下		上		中	
主な作業	立て札立て																							
																								
水管理	田植え																							
																								
主な作業	除草剤散布																							
																								
主な作業	異株抜き																							
																								
主な作業	(幼穂形成期) (最高分けつ期)																							
																								
主な作業	穂肥																							
																								
主な作業	病害虫防除																							
																								
主な作業	異株抜き																							
																								
主な作業	(出穂期)																							
																								
主な作業	異株抜き																							
																								
主な作業	異株抜き																							
																								
主な作業	(成熟期) 収穫																							
																								
水管理	4～5cm																							
																								
水管理	★穂肥のできる草姿にする																							
																								
水管理	生育程度に応じ追肥の時期、量、回数を決定																							
																								
水管理	移植後 深水 5～7日 活着促進																							
																								
水管理	日中止水、夜間かん水																							
																								
水管理	(中干し) 生育抑制 根の活力促進 ※生育に応じ程度を強弱																							
																								
水管理	間断かん水																							
																								
水管理	かん水																							
																								
水管理	落水																							
																								
病害除時期	イネミズゾウムシ																							
																								
病害除時期	イネツトムシ																							
																								
病害除時期	もみ枯細菌病																							
																								
病害除時期	葉いもち																							
																								
病害除時期	穂いもち																							
																								
病害除時期	稲こうじ病																							
																								
病害除時期	カメムシ類																							
																								

5. 出芽・育苗

- 育苗器利用の場合は、温度設定を30℃とする。なお、出芽長は床土の表面から5mm程度とする。
- 育苗は基本的には一般の育苗に準ずる。

6. 移植

- 栽植密度は通常18～22株/㎡（60～70株/坪）植えを基本とする。
なお、疎植（50株/坪以下）は、株揃えが悪く品質が低下したり、雑穂が見つけにくくなることもあり行わない。
- 植付本数：3～5本/株
- 原則異品種混入防止のため捕植はしない。

7. 水管理

- 日中止め水、夜間かん水する。田植え直後は、水深を5cmに保ち活着を促進する。
- 除草剤散布時は、やや深水（4～5cm）とし、散布後1週間は落水・かけ流しをせず完全止水管理とする。
- 田植え後30日および最高分けつ期前に、生育を診断し、中干しを行う。
- 基本的に間断かん水とし、強い中干しは行わない。ただし、生育中期に生育量が多く、葉色が濃く推移した場合は中干しを行う。
- 落水時期は出穂後30日頃とし、収穫7～10日前までは走り水を行う。（早期落水はしない。）

8. 病害虫防除等

●病害虫対応	葉いもち	・箱施用剤を施用するか、または、田植え時頃に粒剤で防除する。
	穂いもち	・穂ばらみ期と穂揃い期に、オリゼメート粒剤等で防除する。
	もみ枯細菌病	・出穂前から乳熟期にオリゼメート粒剤等で防除する。
	稲こうじ病	・出穂10～20日前にドイツポルドーA、収穫45日前頃にモンガリット粒剤等で防除する。
		・前年発生が見られた「ほ場」は必ず防除する。
	イネミズソウムシ イネドロオウムシ	・常発地では箱施用剤を使用する。
	カメムシ類	・畦畔や休耕地の雑草刈りを出穂前20日頃と出穂期頃の2回、地域単位で実施する。
		・穂そろい期とその7日後に薬剤で防除する。

- 種子伝染性病害虫対応

ばか苗病	・病原菌は種子もみで感染するので、種子消毒が重要である。 ・発病株から胞子が飛散して感染もみとなるので、病害株を見つけたら抜き取る。
イネ心枯線虫病	・センチュウは種子もみの中で越冬するので、スミチオン等の殺虫剤による種子消毒が重要である。

9. 雑草

- 種類および発生状況により適切に防除する。
- クサネムの種は、調製段階での除去が困難なため、発生した場合は手取り防除する。

10. 収穫・乾燥

- 異種穀粒およびゴミなどの混入防止のため、早めにコンバイン、乾燥機および調製機の清掃を徹底する。
- 作業中こぼれ籾が発生した場合はすべて清掃廃棄し、絶対に種子に混入させない。

（収穫）

- 帯緑色籾率3%程度が収穫適期である。出穂後40～46日が目安日数となる。
- 早刈り、刈り遅れは品質が低下するので注意する。
- 高水分刈りは発芽率が低下するので、水分は25%以下で収穫し、収穫後は速やかに乾燥する。
- その年の最初に収穫した1タンク分またはコンバイン袋3袋（100kg程度）は種子にしない。
- 種子と一般米の両方を栽培している場合は、種子を優先して収穫する。
- 必ず、試し刈りを行い、水分、割籾、脱ぶ粒等のないことを確認する。
- 雨上がりや朝つゆで稈がぬれているときは、乾くの待って収穫する。（脱芒しやすい。）

（乾燥）

- 高温、急激な乾燥は避け、乾燥温度は40℃以下で行う。
- 穀粒水分が14.5%となるよう乾燥する。

11. 種子の農産物検査規格

- 発芽率：90%以上
- 整粒：90%以上
- 被害粒：0.5%以下
- 異物：0.2%以下
- 水分：14.5%以下
- 色：品種固有の色

全量合格の優良種子の生産に努めましょう

全農とちぎ・栃木県・(公社)栃木県米麦改良協会